# 第41回岐阜外科集談会

日時：昭和41年5月18日　　於：岐大附属病院丹羽講堂

## 1) 頸部食道憩室性瘻の1治験例

岐大第Ⅱ外科
佐治　董豊・佐藤　好水

我々は最近頸部食道第1狭窄部位に開口する食道憩室より発したと思われる食道瘻の1例を経験し，数回の手術で根治しえたので報告した．

症例　36才，男．初診昭和40年6月20日．

同年5月上旬風邪を引き，左頸部に腫脹を来し切開をうけ，その後に食道憩室性瘻となり，解剖学的特徴より多発性瘻となり難治なものとなつたが，最後に根治しえた．

これは最初 Grenzdivertihel が存在し，風邪等により憩室炎を来し周囲炎となり腫脹を来したものと思われる．

さらに Grenzdivertihel の発生原因につき1知見を述べた．

## 2) 教室におけるメッケル憩室の経験例

岐大第1外科
岩堤　慶明

当教室における昭和31年から，41年5月まで約1000例の開腹術を行つた症例の内で，10例のメッケル憩室を認めた．

この内，男性7例，女性3例で，男性は，女性の約2倍の頻度でみられた．位置は，回腸弁より15cm（0才）から150cmの間にあつて，大きさは0.8×0.5cmから鶏卵大のものまであり，腸間膜附着部に存在するもの2例，反対側のもの8例認めた．10例中，病変を伴つていたものは4例あり，穿孔を認めたもの2例，ヘルニア内容，腸重積の先進部のもの，夫々1例で，穿孔を認めた前の2例は，0才と1才の乳児があり夫々，切除，腸瘻の処置を施したが，死の転帰をとつた．尚メッケル憩室と断定するのに有力な根拠となる，索状物，血管走行のどちらかがみとめられるものは，2例あつた．

## 3) 誤嚥魚骨による腹腔内膿瘍の1例

岐阜大第1外科
安藤　充晴

症例　60才男子，無職

主訴　下腹部痛及び食欲不振

現症歴　約10日前37.5℃前後の微熱と下腹部膨満感，鈍痛を自覚し，食欲は不振で水分を摂るにすぎなくなり，便秘をきたし来院す．

既往歴　約30年前虫垂切除をうけた．

全身所見は顔貌尋常，皮膚やや乾燥，脈拍68，血圧118～60mmHg，呼吸数18でやや胸式．腹部は全体に軽度膨満し，特に左下腹部に圧痛，ブルンベルク氏徴候を認め，手拳大，弾性硬，平滑な腫瘤を認めた．

これをG.O.F.全身麻酔下に開腹するとき，腹膜は炎症性に肥厚し，左内鼠径窩を中心として腹壁に鶏卵大の腫瘤があり，これに腸管の癒着は認めなかつた．これを剝離掻爬中膿及び肉芽組織と共に約1.2cm長の魚骨様異物を認め摘出した．

## 4) 新生児消化管筋層欠損による穿孔性腹膜炎の2例

岐大第2外科
佐藤　　収・国井　洋一

症例1　生後7日目の男児，生下時体重2700g．出生後胎便の排出あるも生後4日目より腹部膨隆及び顔面チアノーゼあり入院，入院時腹部膨隆を認め腸雑音消失，白血球数25000，腹部単純撮影にて腸管外液面像を認め，全麻下に開腹した．胃前壁中央部に胃の長軸に垂直に胃の2/3に至る線状破裂あり，縫合閉鎖したが，術後23時間で死亡した．

症例2　生後5日目の男児生下時体重2500g，嘔吐及び腹部膨隆を認め入院，入院後少量の排便あり，腸雑音微弱ながら聴取出来た．腹部単純レ線像で穿孔所見なし，入院後軽快していた腹部膨隆が6日目に高度となり，7日目に死亡，剖検にて空腸に5ケの点状穿孔あり組織学的に空腸筋層発育不全及び欠損を認めた．以上2例の消化筋層欠損による穿孔性腹膜炎を経験したので報告し，併せて文献的考察を加えた．

## 5) 整復時腸穿孔を起し汎発性腹膜炎を来した大腿ヘルニアの2治験例

大垣市民病院外科
森　直之・蜂巣賀喜多男
寺本　勅男・松永　吉和
森　直和・加藤　量平
村瀬　充也

大腿ヘルニアは極めて稀なものではないが，屢々重篤な合併症を見るものである．以前に右大腿ヘルニアの整復時に小腸穿孔を来し，汎発性腹膜炎を併発した症例を当外科の加藤が報告したが最近再び同様の症例を経験したので，ここに併せて報告し若干の統計的観察を加える．

症例1　82才の女，主訴は腹痛，昭和37年10月9日に右鼠径部の腫瘤を自分で整復した際腹部に激痛を覚えその後嘔気嘔吐も伴う様になり来診した．腹部は軽く膨隆し下腹部に筋性防禦，圧痛あり，右鼠径部に鳩卵大の腫瘤を認めた．開腹術の結果盲腸より約1mロ側の回腸に2cmの穿孔を認めた．

症例2　72才の女，主訴は腹痛，以前より習慣性に左鼠径部の腫瘤を認めその毎に整復していたが来院当日の午前10時頃に同様腫瘤を家人が整復した直後より腹痛あり，昭和41年1月21日午後5時頃来院した．開腹術により盲腸より1.7mロ側の回腸に経1cmの穿孔を認めた．

## 6）Valsalva 洞動脈瘤右房破裂の1治験例

国立療養所　日野荘
山本　博昭・小林　君美
井上　律子・黒田　良三

我々は最近 Valsalva 洞動脈瘤の右房破裂の1例を経験したので報告する．患者は39才の男子で第5肋間胸骨左縁で最強点を有する収縮期雑音を聞く．右心カテーテル検査の結果，心房位において左-右短絡があり，軽度の肺高血圧症が認められる．心房中隔欠損症並びに軽度肺高血圧症の診断の下に体外循環下に開心術を施行した．手術時，無冠動脈洞より生じた動脈瘤の右房破裂であることを確認し，心房側より動脈瘤基部を切除し，切除基部に Teflon patch をあてて閉鎖し，治療目的を達した．

Valsalva 洞動脈瘤のなかでも，本例のような型は，本邦においては極めて稀なものとされているので，若干の文献的考察を加えて報告した．

## 7）完全臍腸管瘻の1例

岐阜市民病院
島田　脩・安江　幸洋

我々は最近本症の重篤な合併症であるT字型腸管脱出を来し嵌頓絞扼症状を呈せる1例を経験したので報告する．症例，生後35日の男児，20日予定より早く出産，安産で生下時体重3050g，生後15日頃臍より糞便様の排泄物を見る．以後常時臍より小量の排便あり．生後34日，即ち手術前日に初診，一般状態に著変なく他に視診上異常なし．

局所々見，臍部に小指頭大，赤色の軟かい粘膜に被われた突出あり消息子約3cm挿入し得る．瘻孔より造影剤を注入すると腸管内に移行し腸管と交通ある事を知る．翌朝検査が誘因となつたものかT字型に腸管の外鞘脱出を来し，嵌頓イレウス症状を来した．そのため緊急手術を行う，瘻管は回腸末端より約20cmロ側の回腸に開口して約3cmで重積腸管は瘻孔の開口部を中心に口側3cm肛門側12cmに及んで居り瘻管と腸の一部を含め切除．術後11日目体重4300gで全治退院した．

## 8）糖尿病性足壊疽患者に偶然発見された横隔膜脂肪腫

岐大第1外科
種　田　耕　三

症例は66才，男子，7～8年前より糖尿があり，2年前から間歇性跛行，更に1ヵ月前から，右足から下腿に激痛を伴う発赤腫脹を来す．昭和40年2月6日入院し，糖尿はコントロールできたが，壊疽進行し，更に肺炎を併発して，3月12日死亡する．剖検を行うと，肝，腎，膵，心臓に，動脈硬化及び糖尿病性変化をみる．他に，右横隔膜の肝臓面に，縦2.3cm，横5.0cm，厚み2.0cm，表面平滑の脂肪腫を認めた．

本症例は死後剖検によつて偶然発見されたもので，病変としての存在価値は少いが，横隔膜の原発性腫瘍は，文献上，稀なもので，病理剖検輯報昭和33年～37年の間に59000例中1例，横紋筋肉腫の1例を見出したにすぎない．

## 9）被膜内出血を来した腎周囲炎の1例

岐阜市民病院泌尿器科
尾　関　信　彦

27才，女，右側腹部疝痛を主訴として，諸検査の結果，臨床的には右腎梗塞，右腎腫瘍，右腎周囲炎等を疑わせ，腎剔除術により腎被膜内出血を主とした腎周囲炎である事が判明した．剔除腎は肉眼的に線維被膜に著しい肥厚を示すが，しかし被膜，実質ともに膿瘍形成等は認められない．被膜にには出血性壊死空洞がみられ，これは腎下極め出血性壊死巣と交通している．組織的には，非化膿性炎症で特に被膜の出血を主とした腎周囲炎であつた．腎実質には一部間質性腎炎の像があるが，これは出血に伴う二次的変化と考えられる．本症は諸種レ線像，その他の検査及び組織像から，腎とは無関係なる腎周囲炎を来たし，被膜血管よりの出血と血腫形成が，腎実質の損傷を招き，二次的出血と腎実質の出血性壊死を助長したと考えられる．

### 10) 前照射の2症例

県立岐阜病院放射線科
奥　孝行
岐大第1外科
柴田正敏
岐大第2病理
高橋　親彦・青木　敦

第1例：60才男．食道癌，嚥下困難が3ヵ月続いて来院．レ線像上，下部食道で横隔膜の上下にわたり10cm長の陰影欠損あり．$^{60}$Coの照射を行い4750 R/39日を投入．11日後に手術施行．開腹術及び右開胸術にて主病巣を全摘出し，リンパ節摘除を行う．組織学的に原発巣及びリンパ節共に退行性変化が強かつた．術後4ヵ月の現在，無症状で健在．第2例：59才女，左乳癌の約10ヵ月の病歴で左乳腺の巨大な腫瘤形成を訴え来院．$^{60}$Coの照射を行い原病巣を縮少させ，6週後に根治手術施行．照射前の扁平上皮癌巣は摘出標本に全く認められず，また腋窩の指頭大の摘出リンパ節にも癌病巣を組織学的に証明しなかつた．

### 11) 早期癌と考えられた Lymphatic Gastritis の1例

岐大第2外科
上田茂夫

レ線透視及び内視鏡検査にて早期癌と診断され，而も細胞診，切除胃の組織検査で全く癌細胞を認めることの出来なかつた慢性リンパ性胃炎症例を経験した．27才の男子で1年10ヵ月前から空腹時心窩部痛，食思不振を来し入院，内視鏡検査で胃角部後壁に皺襞集中像，浅い潰瘍を認め，レ線透視で胃角を中心とした部に皺襞集中，断裂像，これを中心に広汎なErosioをみとめ IIc と診断，胃切除を行つたが，切除胃では胃角を中心に12×10cmの範囲に皺襞なく，表面顆粒状であり，組織学的にも粒膜下層はリンパ組織，結合織で占められ，悪性像を認めなかつた．恐らく広汎な Ul-II 又は Ul-I の深い病度に炎症が加わり，現在の状態にまで治癒して来たのをたまたまとらえたものと考えられた．

### 12) 水腎・水尿管に対する Culp 氏法による手術症例

岐大泌尿器科教室
篠田　孝・磯貝　和俊
西　守哉

2例の上部尿管狭窄に起因する，比較的強度の水腎症に対し，Culp 氏法に準じ，腎盂尿管成形術を施行し，著明に腎盂・腎杯の形態の縮小及び腎機能の改善をみた症例を報告した．特にわれわれは，腎の保存的療法を試みるべく，術前の腎機能の精査に，点滴持続大量静注による排泄腎盂撮影及びラジオアイソトープレノグラムを参考にしている．

### 13) 左睾丸捻転症の症例

岐大泌尿器科教室
劉　自覚・篠田　孝
磯貝　和俊

我々は13才の男子の左睾丸360°内旋して壊死におちいり，発病後3日半を経過した捻転症に，除睾術を行つた症例を報告し，あわせて簡単な文献的考察を加えた．

### 14) 術後急性腎不全の腹膜灌流による2験例

大垣市民病院外科
森　直之・蜂須賀喜多男
寺本　勅男・松永　吉和
森　直和・加藤　量平
村瀬　充也

症例1　49才女性．頭部皮膚癌，皮膚移植術を行う．麻酔経過は順調で，3時間半．術後7日より乏尿，9日には尿毒症を呈し，腹膜灌流を開始，以後5日間に

27回施行し，全治した．

症例2　62才男性．直腸癌，腹会陰式直腸切断術を行う．麻酔経過は順調で，3時間半．6日目より乏尿．11日には尿毒症を呈し，腹膜灌流を開始．4日間に20回施行，かなり回復したところ，23日に腎生検にて急性増悪を来し再度灌流を行い，救命しえた．

基礎疾患として症例1は慢性腎盂腎炎，高血圧，症例2は腎硬化症が想定されるが，直接の誘因は不明．

私達の実施した腹膜灌流の利点と欠点について若干の考按を行つた．

## 15）馬尾神経鞘腫の1例

岐大整形外科
西本　虎正・丹羽　昭右

症例は18才男子で，頑固なる坐骨神経痛及び軽度の排尿困難を訴え，殆んど歩行不能であり，ミエログラフィーの結果第2腰椎椎体下縁で造影剤の停留を認め，手術により2×4cm大の腫瘍を摘出，組織検査の結果ノイリノームと判明した．術後の経過は良好で，2ヵ月で全治した．